

ともしび



1987. 7

—大学婦人協会東京支部会報—

第2号

●“女”として生きるということ

●“暮らしの中の発見” 如月小春氏の講演を聞いて

支部総会開かれる

今年の東京支部総会は、四月十八日(土)に国立教育会館で開かれた。例年は五月だったのが、会計年度に合わせて活動の開始を円滑にするために、一ヶ月早めて開催されたもので、出席六十七名、委任状提出三百六十名を得て、成立した。初めに、吉武支部長が挨拶し、これまでの会員の協力に感謝すると共に今後の活動への参加と協力を呼びかけた。特に、「ともしび」に触れて、原稿の面などで一層の協力を要請した。

審議に入り、六十一年度事業報告および決算報告とその承認、さらに会計監査報告がなされた。次いで、秋から予定されている文学講座をはじめとする今年度事業計画および予算案が満場一致で承認された。その他、支部規約第七条を改正して、これまで地位が曖昧だった監査二名を正式に支部役員に加える案が承認された。さらに役員の一部交替の承認と新任委員の紹介があつて、総会の議事は滞りなく終了した。

休憩のあと、いつになく華やいだ雰囲気、如月小春氏の講演が行われ、好評のうちに閉会となった。(平野)

全国総会に出席して

第三〇回通常総会は四月一日京都市比叡山ホテルで開催された。早春の京都は肌寒さを感じさせたが、比叡山の中腹にあるこの会場へはバスサイドホテルから直通バスが運行され、眺望も素晴らしいドライブ気分が楽しめた。前日の評議員会では総会に提出する議題の検討、各支部からの報告が行われた。夜の懇親会では一年ぶりに言葉を交わす懐かしいお顔もあり、新たな知友も得、またこの日、都をどりの前日であるにも拘らずご出演下さった井上三千子さんの伝統ある京舞を観賞させていただき、折しも戸外は雪景色となり京の夜に一段と風情を添える集いとなった。伊東会長の国連総会のお話、甘楽元神戸支部長のニュージールランド総会のご報告もリラックスした雰囲気の中で伺えた。

総会の内容については本部会報に詳細が掲載されるのでご覧いただきたいと思うが、今回特に審議された懸案の中で、国内奨学金授与の際入会を義務づけるべきかどうかの討議で、結果は奨学金の趣旨、会の現況から入会を勧めるにとどまったが、

各支部共若い層の会員拡充に苦慮している状況が切実に感じられた。アジア大学婦人連盟への加入についても、日本の国際的立場と国内の現状を考えると判断の難しさを感じたことである。例年一般会員の総会出席者は少ないが、平素支部活動を如何に活性化すべきかに頭を悩ませている私共には協会全体の動きを直接に把握し、どのようにして支部活動と繋がりを持たせてゆくべきか、会員一人一人がより明確な認識を持つことが必要ではないかと思う。東京支部のおかれている状況は他支部とは異なるが、支部としての事業のすすめ方等、総会での交流は参考になることも多く、できれば討議にももう少し時間的余裕が欲しいと思う。本部の果たす国際的、全国的役割はもとより、各支部の地域での地道な実践が基盤として強くなることも大切ではないかと思う。その意味からも来年はより多くの会員が総会に参加されることを望んでいる。(田中)



如月小春氏の

講演を聞いて

今年の支部総会後の講演は、学生時代から多方面にわたって御活躍の如月小春氏を迎え、『暮しの中の発見』という演題で、さわやかな一時間三十分を過ごすことができました。ピンクのストライプのワンピースに、髪にはやはりストライプのリボンをあしらひ、それはまさに、清楚な花を思わせました。テレビ等で拝見するより、更に美しい氏に、しばしうつとりしたのは、私だけではないでしょう。

如月氏は、作品のテーマを、日常生活の中で思いつかれ、特に、旅などで、ふれあった人や街が、そのテーマの設定に重要な役割りを果たしているようです。

その土地を知る手段の一つとして「トマソン」探しをなさっています。かつて巨人軍に期待をもつて迎えられながら、最後まで不発に終わってしまったトマソン選手からきたネーミングです。これは、東大の藤森先生を中心に、街の中にあつてもう役にたたなくなっているものを見つけ出すことを行い、もはや存在価値のなくなったものを通し、その街のかつての人の生活、街の様子を知ろう

と試みているグループです。

又、デパート・市場を、その街を知る指標となさり、売られているものから、そこに住む人達の暮らしを見ようとなさっています。如月氏の家族三世代の目を通しての街、デパートの価値感の移りかわりは、私は十年位の差はあるものの、三世代で暮らした私とも共通するものもありなつかしく聞きました。日本橋の三越へのこだわりを持ち、そして新宿のデパートへと場所が変りました。私も目白に住みながら、池袋を利用しだしたのは、最近の事です。数年前までは、池袋は洗練されておられないというイメージで敬遠しておりました。これも氏の御祖母上様のおっしゃる農業鉄道の名残があったからでしょう。

東京も、皇居周辺から山手線内、そして中央線沿線と人の生活する場が変化し、更に首都圏と呼ばれるのは、地下鉄、私鉄の発達で、周辺七県の中でもどんどん広がっています。目白でさえも、八十才代の方の話では狐のさびしい所だったとか……日本の首都東京も、こんな広汎に発達したのはほんの最近のことなのでしょう。そしてもう一つ、一人々々が持つ

言葉を通してその人の育った環境、時代、生活を知ることが出来ます。

言葉からもその町をみる事が出来ます。大阪商人の「考えときま」の言葉を、私は、婉曲的な断り方だと理解していましたが、人間関係は断ち切らずにいこうとする大阪人の知恵なのだ、この講演で初めて知りました。

自分と違う文化、人、町と出会い、自らを啓発し、更に自分をなりたいたせている風土を知ろう、私もたくさんさんの町、人と出たいと思います。

(山村敬子)

如月小春氏のプロフィール

一九五六年東京杉並に生れ、東京女子大哲学科を卒業。大学時代の友人に誘われたのがきっかけで演劇活動を始め。誘った方の友人は卒業後すんなりと結婚されたそうだが、如月さんはその後演劇の道に進み、一九八三年には「NOISE」を結成。主宰、創作・演出に携わると共に、最近では評論、司会と多彩な活動を行っている。

大正デモクラシー時代、モガと言われた祖母の影響を受け、また九州



大分から上京し進学された母の進取の気性を多分に受け継いだ一面が伺われる。その祖母が共立女子大、母が津田塾大、妹が聖心女子大と、異なった女子大出身の身内に囲まれ、考え方に偏りが無い。また都会育ちを生かし、豊かな都市の感性で人と街を発見し描写するところが面白い。著書には「都市の遊び方」「私の耳は都市の耳」他多数あり、戯曲作品には「工場物語」「ロミオとフリージアのある食卓」等がある。

他支部活動紹介

茨城支部

静岡敏子

燃えるような霧島つつじ、優雅なうす紫の藤の花、梅の実もふくらんで、隣の音楽園は事務所の帰りのいい散歩道です。四月から春の古典講座「源氏物語」を始めました。大学でもないのに原文を読みつつ、もう十年近く、出席率も好調で、机の足りない日もあります。

去年のセミナーは「女性の再就職」

をとりあげましたが、その報告書のしめくくりとして、二十人ほどの座談会を開きました。大学卒業後ずっと同じ仕事を続けている恵まれた人はほんのひとにぎり。結婚での移動や、出産・育児で一度職を離れると、再就職はたいへんです。予備校の教師、短大の講師、塾の先生、お茶・お花の教室経営、また自分の好きな絵や陶芸、料理などで自分独自の道を開いている人もあり、その苦勞話のホンネが、お互いの励ましにもなり、情報交換のいい場にもなりました。

愛知支部

山口可久美

新幹線が名古屋駅にすべり込むころ、左手に「ヒマラヤ」というビルが見えます。その四階のヒマラヤホールで四月二十六日、愛知支部六十二年度総会が開かれました。福岡支部よりの転入二名の新入会員を加え出席者は約三十名でした。

愛知支部では、毎月一回例会を開き、講演会や、本部の総会、セミナーの報告会等を行い、参加者数は毎回二十〜三十名です。

昨年は八月二十四日に「チェンバロを聴くティーンコンサート」という初めての催しを試みましたが、会員外の方々も含め百名位の集まりとなり好評でした。今年度の行事はこれから決めるところですが、第一回の例会は五月二十三日（土）栄の「チャイナテーブル」という中華レストランで、講師の名古屋商科大学・光陵女子大学教授、加納善子氏を囲み、スライドをみながらフィリピン女性の地位について考える会を開きました。

バス見学会

四月二十八日、参加者四十九名を乗せたバスは予定より早く東京富士美術館に着いた。

この美術館は八王子市の東北に位置し、丘陵を切り開いた斜面に落着いた、たたずまいを見せている。学芸課の方の説明を聞きながら静かな館内をゆっくり見て回った。当日は春の特別展「近世日本美術の名宝」が展示されており、これは小島寿治翁が室町、桃山、江戸三代の美術品を蒐集したコレクションの一部で今回が初公開とのことだった。狩野、

土佐、住吉、長谷川、琳、浮世絵各派の屏風絵、漆工芸等の作品のすばらしさに心を奪われた。なお彫刻家今里龍生氏の作品も同時に公開されていた。

その後奥高尾の「うかい鳥山」で昼食をとった。鬱蒼とした高尾杉に囲まれた静かな環境の中で、中沢川の清流のせせらぎを聞きながら「瀬降り焼」を味わった。敷地六千坪の中には、五箇山の合掌造りの建物、「加賀前田侯の茶室」、「民具資料館」等がある。

予定時間を少し過ぎて、バスは浅川実験林（桜保存林）へと向った。場長さんより桜保存林、樹木園について説明を受けた後、園内を一周した。淡黄緑色の「御衣黄」、あでやかな八重咲の「関山」、可愛い菊桜、枝が皆上を向いて伸びる「天の川」など四月下旬にしか咲かない珍しい桜が見られ、あらためて日本の桜の美しさに感嘆した。

最後に予定外であったが、村内美術館見学も加わり、職員の方の丁寧な説明をいただいた後、十九世紀フランスの巨匠の油彩作品を鑑賞した。村内美術館をあとに参加者一同それぞれ思いを胸に帰路についた。



「女」として生きる

ということ

瀬川三枝子

一九八三年一月、卒業論文を書きおえた満足感と、これからの進路がまだ定まらないという不安感の中で、わたしは福祉奨学生として奨学金を頂きました。おくれればせながら、この紙面をおかりし、深く感謝申し上げます。

わたしは、日常点字を使用している視覚障害者です。大学生活をおくる中で、自己の障害や、自己の性と社会とのかわりを徐々に認識し、見えないことと女であることが社会的ハンディになってしまっているのではないかという思いを抱くようになつたわたしは、視覚障害をもつ女性をとりまく問題を卒業論文のテーマとしました。そしてそれをこれらのライフワークのスタートと位置づけ、わたしが女としていかにわたしらしく生きていくのかを生涯のテーマとしました。

このテーマをより深めてゆくために、貴重な奨学金を使わせて頂いている次第です。さて、わたしは一九八三年四月より、現在の職場である神奈川県立婦人相談所という所に勤務しています。

障害者の中でも重度の視覚障害者とはとりわけ就職がむずかしい状況の中で、仕事をもつことができたことは本当に幸運なことです。その上、女性問題に関心を持つわたしにとって、この仕事にたずさわるチャンスを得たことは「運がよかった」という以外の何ものでもありません。

しかし、四年という月日は、いつの間にか初心を忘れさせ、マンネリズムがわたしをつつんでしまっていました。いま一度自分のたずさわっている仕事を見つめ直し、初心にもどって毎日を送りたいと感じている今日この頃です。

ところで、「婦人相談所」という言葉から皆さんはどの様な仕事を想像なさるでしょうか。少々固苦しくなりますが、この機関は「売春防止法」という法律によって作られているもので、売春をしている女性を「更生させる」ための仕事をする所なのです。ひらたく言えば「売春をやめて違う仕事をしましょう」という役目をなう所というわけです。

ご存知の方も多いと思いますが、今は売春防止法ができた頃の社会とは違い、悲惨な売春は殆ど目につきません。一方で女性達が自らえらんで（本当はのせられて）セックス

産業にまきこまれていっています。社会状況の変化の中で、婦人相談所の役割もおのずと変化しています。

都道府県毎に違いがありますが、神奈川県の場合には法律にもとづいた本来の仕事以外に、悩みごとの相談にも応じています。直接くる人も少なくありませんが、何といても電話による相談が沢山あります。

相談の中心は、夫婦間のトラブル、嫁・姑問題、近所づきあい、様々な人間関係など、人が生きていけば必ずぶつかる問題に関するものばかりで、殆どがこれらの悩みを話せる身近な人を持たない人達なのです。

学生時代に、男女平等とか、性別役割とか、女性にかかわるいろいろな問題について皆で話し合い、今でもそれを栄養源として生きているつもりですが、現実には「机上の論理」とかけ離れていることが沢山あるのだと、相談をうけるたびに思っています。日本の国は豊かで、中流意識の人達が半数以上だといわれています。けれど、物質面の豊かさが人間関係の豊かさを崩壊させ、その結果が小さな家の中にとじこめられている女達におおいかぶさり、ある人はセックス産業に吸いこまれ、ある人は生命を絶つということを余儀なく

させられ、ある人は生きる気力をなくして悶々とした日々をおくる羽目になっているのです。

四年間この仕事にたずさわってき思ったことは、女が生きて生きたらされる社会こそ「健全な社会」ではないかということです。わたしの仕事は悩みをかかえた女の人達を助けることではなく、わたしも女として彼女達といっしょに悩み考えることです。

いずれは離れなければならない仕事ですが、わたしの生き方にもプラスになる仕事としたいと考えています。

プロフィール

和光大学人文学部人間関係学科 一九八三年卒。同年四月神奈川県立婦人相談所に配属され、視覚障害者にかかわる視覚障害者雇用問題、図書館利用問題などにも活動している。地域合唱団に属しコーラスをたのしんでいる。



『婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略』



―セミナー勉強会―

(1) 今井けい氏「新国際経済秩序」

国際婦人年の一九七五年から、一九八五年の10年間、世界婦人会議が、メキシコ、コペンハーゲン、ナイロビと三回にわたって開かれ、南北問題、人種差別、男女不平等、等あらゆる差別の根源への追求がなされ、その問題意識の高まりは近年至る所で見られる。

特に、第三世界と先進国との格差をなくすために、途上国の資源と経済への主権の確立をめざし、多国籍企業に対する規制や、「人間の基本的ニーズ」(B H I V)を満たす社会資本に向けて、援助が途上国の社会下層に行きわたるような、新国際経済秩序(N I E O)の樹立が求められている。

この勉強会を通して、貧困の巢である第三世界に、21世紀に、先進国、日本、そして私たちは何をなすべきか、身近な問題として考える場を与えられた有意義なお話であった。私自身、南米の大国とは言うものの、社会保障も整っていないブラジルに住んだ経験から、路上で、はだして

物乞いする女性や子供、低賃金で死を迎える直前まで働かざるを得ない貧困の女性を思い、この問題の重要性を痛感し、積極的な援助の働きかけを感じた。(武田純子)

(2) 浅倉むつ子氏「女性労働問題」

一、国際婦人年一九七五年以降の基本的考え方の変化

二、性別役割分業観の見直し克服
三、具体的な諸問題 家庭責任をもつ労働者の問題

四、労働条件の整備とセクシアルハラメント

この四項目に分けて分り易く世界中の様々な実例を上げられた。

「社会と家庭における男性の役割の変化なしには婦人の地位は変りえない」とする宣言。性別役割分業を根底から見直すという主張。家族の福祉と児童の養育は両親および社会の責任である。という原則から、スウェーデンでは一九七八年に父親に九十日間の育児休暇をとるように義務づけ、父親がこれを免除されるには妻の同意のサインが必要という。

このような先進国の具体例を通して、色々な角度から考える勉強になった。私たち女性は男性にうまく言いにくめられ、言い逃れをされて男性上位の社会に甘んじてきた。これからは少しずつでも女性の地位向上の社会を作る為に如何なる戦略を考えるか、次の講義が楽しみである。(芥川妙子)

(3) 山下泰子氏「女子差別撤廃」

女性の地位向上のための国連、特に婦人の地位委員会の活動、性差別禁止の宣言や条約を経て「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」制定に至る過程、この条約は女性の権利全体をカバーし、国家ばかりでなく個人、団体、企業に對しても、また慣習や慣行にまで差別撤廃を要求している画期的なものであること、女子差別撤廃委員会(C E D A W)が作られ、個人の資格で職務を行う二十三人の専門家委員が締約国からの報告を検討し監視すること、等が述べられた。

ナイロビ将来戦略はこの条約実施のためのプログラムで、我々はこれを手がかりに差別撤廃の実行を国に迫るべきである。C E D A Wのメンバー、ジュネーブの国連人権部、ユネスコに働きかけることも出来る、

このように先進国の具体例を通して、色々な角度から考える勉強になった。私たち女性は男性にうまく言いにくめられ、言い逃れをされて男性上位の社会に甘んじてきた。これからは少しずつでも女性の地位向上の社会を作る為に如何なる戦略を考えるか、次の講義が楽しみである。(芥川妙子)

『老人介護講座』報告

飯田橋庁舎内東京都社会福祉センターの五階に障害者と介護者のための福祉機器が約六〇〇点常設展示されている。病人介護についての相談や講習も無料ということ、昨年の暮から三回、東京支部で老人介護講座をお願いした。

寝衣やシーツのとり替え・排泄・おむつ交換などビデオ視聴も交えて看護婦さん二人の懇切な指導による実習や豊富な資料の説明などがあった。病人の介護に当っては病人のプライドを傷つけない配慮が大切であること、病人に不安感を与えぬようにひと声かけてから動作を始めることなど大いに参考になった。当センターでの介護教室、相談、ビデオ視聴は個人でも受付けている。

(電話〇三・二三五・一一六七)

(峯川)

J A U Wは「国連婦人の十年日本大会の決議を実現するための連絡会」「国連N G O国内委員会」のメンバーであり、I F U Wは国連経済社会理事会对する諮問機関であるから我々会員は他国の情報も捉えて、国内でも国際的にも、積極的に働きかけを行うべきである、と結ばれた。(山崎みね)

お便りコーナー



六十一年度東京支部新入会員から次の三つの質問についてお答えいただきました。①大学婦人協会入会の動機 ②東京支部活動に対する希望・意見 ③「ともしび」に関する意見・創刊号の感想。

次号からこのスペースを皆様の生の声を反映する場として、特に支部活動に直接参加出来ない会員の交流・意見の交換に御利用下さい。

(一人四百字まで)

- ①友人からIFUWの活動について聞き、日本でのその活動組織である大学婦人協会の存在を知った。
また、大学院の先輩から、女性研究者への奨学金等のプログラムがあることも教わり入会した。
- ②活動に参加しつけないと、プログラム内容などには興味があっても、つい億劫になってしまう。また、時間的にも昼間に集中しているため、なかなか都合がつけにくい。
- ③「私と生涯教育」など諸先輩の体験談を興味深く読ませていただいている。今後もこの種のを続けて頂きたい。

佐藤千登勢(一橋大)

ともしび二号 発行日 一九八七年七月一日

①協会を通じ、社会とくに国際的視野を広め、交流、親善、改革にとめたいと思った。

②身近な集まり、勉強会などをやられてはいいがですか。

③会員間のインフォメーション交換に、もっと使ってほしい。

倉橋 祐子(慶応大)

①津田塾大学の高野先生のクラスでお世話になった萩原芳子さんのご紹介で入会した。

②女性の生涯教育及び地位向上という目的を強く打ち出してほしい。

石井由美子(都立大院)

①日常の生活のみならず、社会の出来事にも広く目を向け、(将来は)何か社会的な活動の場が出来ることがあれば参加したいと思い、入会した。

②現在の処、日々多忙の一語につき、なかなかいただいた案内の行事、セミナー等に参加できるまでに至っていない。また、日中はフルタイムの職業を持っているため、平日の勉強会等にはなかなか参加出来そうにない。いずれ何らかの形で主体的に活動する側に回ることができたらと考えている。

③いつもいただいている本部からの会報に比べて、非常にやわらかさ

を感じた。同じ印刷物ではあっても、本部から送られてくるそれとは違って、行間にゆとりがあつて読み易いといったようなことも関係しているかも知れないが。実際に行事やセミナーに参加した方からの生の声や、また「私の生き方」などについての記事などは、非常に刺激を受け、啓発された。日頃、活動とは遠ざかっていても、この「ともしび」を通して、より一層身近なものに感じることができ、よい媒体となるのではないかと思う。

東福都美子(青学大)

歌留多会

―百人一首御案内―

昨年正月の新聞に中里恒子氏が、「春の思い」という随筆に、若い頃は百人一首が盛んで招んだり招ばれたり、わくわくしたものだ、今は取り札を並べて絵のはいた読み札をちらつと見て下の句を探したりひとり遊びである。いやになればすぐやめられる。誠にのんびりしたものである……と書かれてあるのを読んだ胸の衝かれる思いがしました。氏はどの枯れた心境には程遠い私共は、三年来、少数の同好者と毎月手

合わせをしています。百人一首をつかしむ方、大好きな方、いつでも気軽にお出かけ下さい。愉しく遊べることは請け合いです。

毎月第四水曜日 午後一時～四時
津田塾同窓会館 二階日本間

(千駄ヶ谷駅前)

会費 五百円

お問合せは 鈴木 道

(03-6021-3152)



編集後記

創刊号の編集の時には編集委員一同肩のこらない親しみ易い会報をとお願いをこめて文字通り暗中模索でした。刊行後、直接会員の方々からの反応は少なかったのですが、その後、折にふれ何々がよくなったという声の方々が耳に入るようになり、潜在的愛読者が確実にふえつつあることに意を強くし、一同大変な意欲を持ってがんばりました。ユニークな御意見をどしどしお寄せ下さり、「ともしび」を共に育てて頂きたい存じます。(今村)